# やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」（青森）発行

| | |
|---|---|
| 誌　　名 | やぶなべ会報 |
| 号/発行年/頁 | 19 / 2006 / 5-15 |
| タイトル | コスタリカの生物、見て歩き記録 |
| 著　者　名 | 中山順一 |

# コスタリカの生物、見て歩き記録

第22代　中山 順一

2004年8月1日から10日までの日程でコスタリカに行ってきましたので、生き物を中心に旅行の様子を、拙い文ですが報告します。文中、なるべく見たことをお伝えしたいと思いますので、調べなくてはわからないことは最小限にします。そのため、記述が一般的でないものや、特殊な例になっているものもあると思いますが、ご容赦願います。また、写真は出来が悪いものも多く恐縮です。

さて、コスタリカはあまり知られていない国だと思います。基礎知識を列記します。

地域、中米メキシコの南方、パナマの北となり。Costa(海岸)Rica(豊かな)。日本の四国と九州を合わせたくらいの面積。首都サンホセ。公用語スペイン語。民族、スペイン系白人95%位。先住民は少ない。識字率は95%以上。何よりも1949年に憲法で軍隊を廃止した国であり、治安も大変良く保たれている。「自然保護」を国策の中心に据え、「エコツーリズム」の先進国です。　　＊政府観光局編集「コスタリカを学ぶ」を参考にしました。

## (1)モンテベルデ

アメリカ経由でサンホセへ着いたのは、夜半過ぎでした。翌朝早く、ガイドをお願いした友人の日本人青年兄弟ふたりにレンタカーを運転してもらいモンテベルデ自然保護区へ向かいました。サンホセから北東へ約100km位で山道に入り、40km位未舗装の悪路が続きます。雨も多いのでぬかるんで掘られた深い轍の道はとてもスリリングでした。とても日本の林道の比ではありません。あまり多くの観光客が押し寄せないよう開発しないのだとか言われていますが、この道を定期バスも走るのです。車につかまる腕も疲れが限界に来た頃やっと着きました。モンテベルデ(緑の山の意味でしょう)は案外にぎやかで店やホテルがそこここに見られ観光客も多く見られます。コスタリカは太平洋と大西洋に挟まれた細長い国で両方の影響を受け、中心部には活火山がそびえ、実に多彩な自然が見られるのが大きな特徴です。

<写真1>　ジャングルウォーク

ここモンテベルデは山中で大洋から上昇してくる水分のため雨量が多く、熱帯雲霧林という独特の自然があります。晴れていてもすぐ霧がかかり、にわか雨が降るため道路のぬかるみの水はなかなか乾きません。

さてここでの最大のねらいは美しい鳥ケツァールです。長い緑の尾に赤い模様のケツァールは、手塚治虫の火の鳥のモデルであると言われています。よく見られるのは1～4月と言うことなので今はオフシーズンです。昼のサンドイッチを食べて

早速ジャングルウォークツアー<写真 1>です。これはジャングル内に付けられた道を歩くのですが途中高い吊り橋がありジャングルの森を上から見ることができます。モンテベルデのジャングルは子どもの頃から考えていたジャングルそのものでした。ターザンが出てきそうな長いツタが垂れ下がっていて、実際人がぶら下がって遊んでいました。また、樹木という樹木には苔やランが着生<写真 2>していて水分を保ってしっとりとしています。映画ジュラシックパークのジャングルはコスタリカをモデルにしたと言う話も良くわかります。これに対して東南アジアのボルネオのジャングルは、意外にも日本の裏山と見かけはそんなに違和感がなかったように思いました。樹木着生ランの花<写真 3>はとても可憐で種類も多く、このような湿度の多い所でこそ育つものだと再認識しました。後半雨が降ってきたところでちょうどハチドリを観察するための餌場につきました。蜜を入れたポットを逆さまにしてある餌場<写真 4>に雨の中でもハチドリが直線的に飛んできて、ピタッと止まってホバリング。緑、紫、赤などに光っている羽色をカメラに撮ろうとしても早くて撮れるものではありません。後で思いついてビデオ撮影で何とか撮ることが出来ました。ハチドリに何種類あるのか、あまりにも素早い動きなので同定はあきらめることにしました。ホテルにも餌場があって飛んできます。続いて、ビニールハウスのバタフライガーデンに行きました。あの憧れのモルフォがあふれるように飛んでいるのはちょっと興ざめですが、幼虫や蛹の展示もあり<写真 5、6>、このあと野外でモルフォを見ることはありましたが、一瞬で通り過ぎていってしまうので、間近で見るのには良い所です。ただ、とても大きいハウスですが、中はあまりにも蒸し暑く長居は出来ませんでした。夜はガイドについてナイトウォークに参加しました。宵の口からだんだん日が暮れる中、ガイドは予め調べてはいるのでしょうが次々と野生生物を発見します。樹木の上の方で寝ているミツユビナマケモノ、長い針で身を守るヤマアラシ、緑色の毒蛇、そして鳥類もモトモトと呼ばれるハチクイモドキやホロホロチョウなどを見つけることが出来ました。

<写真 2>　雲 霧 林

<写真 3>　樹木着生ラン

<写真 4>　ハチドリのえさ台

ホテルは安くて安全で家庭的なホテルを用意してもらいましたので食事も現地のものに

<写真 5>　バタフライガーデン

<写真 6>　餌台のモルフォ

近いものでした。中南米は良く豆を食べるようですが、コスタリカでもあずきのような豆つきご飯が主食です。ただし、豆は米とは別に煮て絶対甘い味は付けません。皿にはご飯(長粒米ですがまさにご飯)と豆の他に野菜や肉が少し付くと言うのが基本で、これをガジョピントといい庶民は 3 食ともこのパターンだそうです。高校生くらいの女の子が山盛りのご飯を食べているのも見ましたし、日本人もびっくりの米好き国民です。また、バナナは主産物であるだけに種類もいろいろあります。生で食べるバナーノの他にプラタノと呼ばれるバナナがあります。プラタノはみかけは普通のバナナとあまり変わりませんが生では全く食べられません。現地の人は同じものだと思っていないそうです。プラタノは煮たり、焼いたり、揚げたりコロッケにして食べます。良くガジョピントの皿に薄切りにして炒めたプラタノがのっています<写真 7>。少し酸味があり甘い味がするイモみたいなものです。

翌朝、モンテベルデ保護区の保護エリア(リザーブ)に行く前に、地元の詳しいガイドに依頼してケツァールを見られそうな所をいくつか案内してもらいました。ケツァールはアボガドの仲間の特定の木の実が好物なようで、いくつかの観察ポイントがあり、地元のガイド仲間は毎日ポイントを見て回って情報を集めています。いくつかまわるうちに雨が降り出し条件の悪い中、交通の多い道路の真上の木にとうとうケツァールの♂を発見しました。繁殖期でないので尾が短めでしたが緑色が美しく、とにかくこの時期では難しいと聞いていたので嬉しかったです。別のガイドによれば、その日は他の場所ではとうとう見られなかったようです。この後保護エリアの中の観察用コースをまわり、熱帯雲霧林の植物を観察しました。野鳥の種類が多いことで有名なこの国でも、天候のせいで他には野鳥はあまり見られませんでした。この有名な保護区は国立公園ではなく民間の NGO 団体の管理している地域で、入場には人数制限もあり、入場料も必要です。

<写真 7>　ガジョピントとプラタノ

午後になって少し離れたところまで自動車で移動し、土砂降りのなか、長い山道を降りてロッジに移動しました。ここは「子どもたちの永遠の

森」を守るNGOの管理する地域です。この団体は長野県の「にっぽんこどものじゃんぐる」というNGOが交流と援助を続けていて、今回ガイドをしてくれた青年達もこの団体の関係でコスタリカに滞在しているのです。ロッジのまわりの森は熱帯雨林と変わり、雲霧林のうっそうとした感じとは少し違ってきます。広い地域に我々しかいないと思うせいかとても気が休まり、ハンモックにゆらゆらと揺れていると近くの林縁をブルーの光を放ってモルフォが飛んでゆくのが見えます。まわりを散策していると、樹木の枝からいくつも大きな編んだ袋状の巣がつり下がっています。これはツリスドリの巣です。樹木の下に空いた穴にはアルマジロが逃げ込んで行くのが見えました。ここは、元は牧場だったところです。緑の牧場も実は森林破壊ですから、買い取って徐々にもとの森林に戻そうとしているのです。夜には遠くに見えるアレナル火山が噴火して溶岩が転げ落ちていくのが双眼鏡で観察できました。近くにはホタルが光ったかと思うと、ヒカリコメツキも光って、水のシャワーしかない部屋でも、虫の光のシャワーで楽しい一夜でした。このロッジの床はきれいに磨かれた木の床で、靴を脱いで入ります。それもくつろぎを感じた理由かもしれません。翌朝、モンテベルデまで山道を上がっていきました。途中で、あの有名なスカラベとしか言いようのない大きなフンコロガシ<写真 8>、羽の透明なトンボマダラチョウ、きれいな青いハンミョウ<写真 9>、水のない道路なのに沢ガニなどが見られました。

<写真 8>　フンコロガシ

<写真 9>　青いハンミョウ

## (2)サンタロサ

次の日、半日かけて北の方にあるサンタロサ国立公園(世界複合遺産)に移動しました。ここは熱帯乾燥林地帯になります。(何が違うのかだんだんわからなくなりました)。ここでは研究者の宿泊施設に泊めてもらいました。部屋は狭く、持ち歩いていたスーツケースがいかにも場違いで置き場に困りました。一応あることはあるベッドは、釘を打っていない板がまばらに敷いてあるだけで、ベッドの上に立ったとき踏み抜いてしまいびっくりしました。日本の山小屋ならそれなりの覚悟がありますが、予想してなかったので、天井のコウモリ、洗面所のヒキガエル、トイレのサソリ、玄関の渦巻き(毒蛇の子ども)などの歓迎に武者震い。

サンタロサ国立公園は、京都賞を受賞した米国ペンシルバニア大学生物学科ダニエル・ジャンセン教授の活動の拠点です。ジャンセン教授についてはご存じの方も多いと思います

<写真 10>　標　本

<写真 11>　ビニール袋飼育

<写真 12>　ジャンセン教授

<写真 13>　幼　虫

が、コスタリカの自然林の再生と保護のプロジェクト(グアナカステ国立公園プロジェクト)の創始者であり、もっとも強力な推進者です。サンタロサ国立公園はうっそうとしたジャングルですが、残された生態系があるだけでなく、実はすでに牧場になっていた所を買い上げ、森林に再生した場所も多いのです。教授の手法で特徴的なのは、パラタキノミストという現地の人たちの存在です。この人たちにも会いましたが男女ともいて、あまり高度の教育を受けているわけではないのですが、この地域の生物の知識が非常に豊富で、生物の採集、記録、標本作り<写真 10>の実戦部隊としてもっとも強力な人材です。現地の人を雇いあげることで雇用を作り出すだけでなく、自然保護の重要性とそのことが現地の人に利益をもたらすことを直接的に明らかにする意味があります。この費用はほとんどジャンセン教授が集めた寄付などによってまかなわれています。

パラタキノミストたちは何日も山(ジャングル)を歩き、素早く次々と幼虫などを採集します。かれらは膨大な種類のコスタリカの昆虫類が頭に入っていて、新種であるかないかをすぐ見分けます。採集した幼虫類は、屋根だけある小屋に張り巡らしたひもに大きなポリ袋をつるした中に食草をいれて飼育します<写真 11>。新種でない場合、寄生バチなどが出て来るほうが嬉しいということです。同じ場所でジャンセン教授も幼虫のカメラ撮影、記録を PC に取り込む事などを一緒にやっているのには驚かされました。忙しい中、私たちを喜んで迎えてくれ、いくつかの形状の面白い幼虫をわざわざ見せてくれました<写真 12、13>。その楽しそうな様子はまさに昆虫好きの少年時代を彷彿とさせるようなものでした。これらの幼虫や成虫の写真などの記録はホームページで公開されていま

す。

一方でこの研究地域は地域の子ども達の環境教育の場ともなっており、ちょうどバスで高校生らしい一団がやってきていました。ジャンセン教授の研究で明らかになったアリとアカシアの共生関係を、この森ではすぐ手近なアカシアの木で子供たちが観察することが出来ます。木に刺激を与えるととげの基部の穴からアリが飛び出して来て威嚇するのです<写真 14>。また、私費で研究を続けている人たちもいます。公園の奥の海岸で起こる「アリバダ」というヒメウミガメの一大一斉産卵を研究している人もいます。軍隊アリの研究者の案内で、たまたま近くに見つかった軍隊アリのコロニーを観察することが出来ました。軍隊アリは夜には活動せず倒れた大きな木の下に 20 万頭位が集まって丸いボール状<写真 15>になっています。昼になり、ここから餌取りのために放射状に歩き始めると昆虫の一大パニックが見られるそうで、それを見越して軍隊アリについて回る鳥もいるそうです。夜の観察の際は毒蛇対策に足にゲートル状に皮のプロテクターを巻きます<写真 16>。ここではコウモリはもちろん、森林性の大きなゴキブリ、エイリアンのような平たいサソリ?<写真 17>が見られました。さて、不思議なことに軍隊アリは、葉切りアリは襲わないそうです。理由はよくわからないようですが、ハキリアリのものすごい数の葉っぱ運びを見ていると、どうもこれは軍隊アリの近い親戚(あるいは趣味の合う同志)だから襲わないのではないかとも思えました。ハキリアリの運んでいる葉の上にかなり小さめの同種のアリがのっていることがあります。ほんとに小さくて同種というより別種が入り込んでいるように見えますが、これはなんと寄生バチなどが上空から近づいて来ることを防ぐためなのだそうです。すごい組織化ではないで

<写真 14>　アカシアとアリ

<写真 15>　グンタイアリのコロニー

<写真 16>　グンタイアリを見つけた

<写真 17>　エイリアン

<写真 18>　枝の上のハキリアリ

<写真 19>　地上のハキリアリ

<写真 20>　ハキリアリの巣入口

<写真 21>　ハキリアリのごみ出口

しょうか。この国立公園内は自動車で移動しますが、ひどい道でも道路があるのはほんの一部で、人の入らないまさに手つかずの森が研究者を待っているのです。

## (3)大西洋岸の湿地へ

太平洋岸のサンタロサを離れて、中央山地を抜け大西洋岸へ向かいます。沿道に人家の少ない道路はやはりでこぼこの泥道です。途中、やはり森林再生を試みている地域を通過しました。森林再生は主に牧草地となっていた土地に木を植えて森林に戻すのが目的ですが、なかなか難しい問題があるようです。はじめはねらいとする原植生の木を植えたそうですが、現状の土壌の上に直接植えてもなかなか育ちません。そこで今度は乾燥地などにも強い木を植えてある程度育ったところで伐採して、原植生に近い樹木を植えて行くという作戦です。(このあたりの説明は耳学問ですので不正確な点が多いと思います)。試行錯誤を繰り返しながらも広大な土地が森林に覆われて、その地域がお互いにつながってグリーンベルトがつくられているという自然回復大事業をここで目の当たりにすることができます。

そんな道路の途中で進行方向右側の小さな崖にハキリアリの巣がありました。道路をまたいで大行列です。たまには自動車が通るのですが自動車の妨害よりアリの数が多いということになります。ハキリアリの行列は道路左側に続き、さらに追ってみると道路脇の 1 本の木にたどり着きます。ハキリアリの行列はその木の一番てっぺんから始まっているのです。望遠鏡で見ると木のてっぺんは丸坊主です。下の方が近いのに上から切り出す決まりのようです。巣のある崖の下の方にもうひとつ別な出口があり

ました。これこそ見たかったゴミ捨て場です。前に見た図鑑の絵では大きなゴミ捨てのあとのゴミピラミッドが描かれていましたが、実際見たのは道路横の溝に捨てているようでした。できるなら目立つようなゴミの山をつくるわけがないですね。ゴミ捨ての出口からも巣の入り口からもアリの歩いたあとは幅 10～20cm のしっかりとした道ができていました<写真 18～21>。

峠越えの途中で、あるレストランで昼食をとりました。友人たちのお勧めのレストランで、家庭の味らしいおいしい食事でした。一応宿泊施設もあるので民宿みたいなところですが、ひどい山道を越えていったいだれが来るのでしょうか、予約の電話も遠くの公衆電話くらいしかないようです。食べている間、現地の人が牛を連れて通ったくらいで、観光も商用も旅行者の影はありません。さらに不思議なのは、すぐ近くに私設の動物園があったことです。誰のためにあるのか不思議な動物園に入ってみました。料金 5US ドルというのはずいぶん高い感じです。たまーにしか通らない観光客がたまーにひやかしていくのをずっと待っているアリジゴクみたいなところでしょうか。動物園一家のお母さんが案内についてくれました。近くに生息する動物が一通り揃っていて、それらはけがをしてつかまったものを保護しているのだそうです。確かに一種、1～2 頭ずつしかいません(オオハシ<写真 22>)。近くでモルフォのような青い光をもつセセリチョウも<写真 23>見ました。ちゃちと言えばそれまでですが、猿や大蛇を首に巻いたりして、案外楽しく見学できました。

<写真 22>　オオハシ

<写真 23>　セセリチョウ

山を下りるころから激しい大雨です。この気候が湿地帯をつくるのでしょう。カーニョネグロという地域に到着です。フィッシャーマンズクラブというので主につり客用でしょうか、きれいなバンガローのホテルです。ここの経営者は、スイスの中でもイタリア語を話す地方の出身です。さすがにパスタ系の食事はおいしく、ペンネはアルデンテでコシがあり、魚料理も充実しているようでした。このようにコスタリカのリゾート地のホテルなどは、他国の出身の人の資本で建てられていることが多いようです。あの不思議な動物園のお母さんは現地の人でしたが、お父さんは他国出身の人のようでした。周辺の国に比べれば、貧富の差が小さく政情安定なコスタリカですが、まだまだ特に経済発展の余地があるように思えます。

<写真 24>　カーニョネグロ川支流

翌朝は朝から雷雨、ボートに乗る予定で不安でしたが少し小止みになったところで出発です。ホテルの前からボートに乗り、支流から本流へ？それともここは川のそばの湖の中なのか、ゆっくりとした流れは川に出てもあまりそれと意識できません<写真 24>。川に突き出ている水上レストランのような売店を兼ねた小屋もあります。さまざまな水鳥が見られました。何種類かの美しいカワセミの仲間、水草の上を歩くクイナやレンカク、長い首が曲がっているヘビウ、目のまわりの青いシラサギの仲間など次々と現れます。岸にはカイマン(ワニ)が寝そべっていて、近づいてもなかなか動きません。ここで期待していたのはなかなか現れない美しいトカゲ・バジリスクです。船頭も細いクリークの中にボートを進めて探します。「あっ、そこ」という間もなく、ボチャンと水の中に消えていきます。特に雄は緑色で立派ですがすぐ木から落ちてしまいます。あきらめた帰り道(川)に、広い場所の真ん中にあるにょきっと枯れ木が立っているところにいるのを見つけました。近づくとバジリスクはもはやこれまでと、こらえきれずに水の上に下りて、なんと水面のうえを後ろ足で立って全速力で走って逃げていくのです。そりゃあ右足が沈む前に左足を出せばできることですが、漫画の世界を見るようです。これを見たかったので大満足、本当に珍しいものが見られました。地元では水の上を歩いたイエス・キリストの話にたとえられています。

<写真 25、26>　イグアナ

ホテルに戻って次の場所に移動です。現地のホテルの洗濯サービスはとても安く下着も一緒に頼んでもいくらにもならないので便利ですが、昨日洗濯を頼んだジーンズは天気が良くないので生乾きになってしまいました。さて、湿地の中を移動していると遠くにシラサギの群がいて、中にきれいなピンク色のモモイロヘラサギやハゲコウが見られました。次にある橋にさしかかると、大きなトカゲが見えます。これがイグアナです、ガラパゴスのは海に適応した珍しい種で、そうでない普通のイグアナは 80cm くらいあって、木の上や地面に寝そべっています。昔は恐竜の生き残りといわれただけあって、精悍な面構えをしていますが、そのわりに動作はゆっくりしています<写真 25、26>。ここに

はイグアナの絵が看板に描いてあるレストランがあってたぶん餌付けしているのでしょう、そこここの樹上に 20 頭以上みられます。その後テレビの映像にも出てきたので有名な場所のようでした。

<写真 27>　セルバベルテ・ロッジ

次のホテルはセルバヴェルデ・ロッジといういわばジャングルホテル。高床式の部屋が鬱そうとした森の中に点在していて高床の廊下がそれをつないでいる構造<写真 27>で、食堂・売店完備で、米国人の老夫婦が目立つリゾートです。早朝バードウォッチングのツアーが用意されているような、ゆっくり楽しめるところでした。そのような快適なところといっても侮れないのは、高床の下に下りてみると緑と黒の派手なカエル、これは毒ガエル<写真 28>、さらにアマガエルより少し小さく、体が真っ赤でうしろあしだけが紺色の、ブルー・ジーンズというあだ名の強力な毒をもつヤドクガエルもホテル内で見られるのです。これらは絵はがきにも良く見られる有名なカエルたちです。ホテルのロビーの植え込みにハチドリの巣があったりもするのです。夜間には白い幕に紫外線をあてて用意してくれていたので期待したのですが、その日はほとんど面白い虫は見られませんでした。自然相手ではそうおもわく通りというわけにはいきません。

<写真 28>　ドクガエル

少し車で行ったところにあるラ・セルバという研究保護区で観察をしました。熱帯雨林地帯なので蒸し暑く、歩くと汗が噴き出ます。野生生物はその環境が気に入っているのでしょう。今まで以上に様々な生物を観察できました。ほ乳類ではハナグマ、イノシシの親子連れ、ナマケモノ、は虫類では木の上のイグアナやヘビ類、モルフォなどの蝶類<写真 29>、ハキリアリ、愉快な形のツノゼミの仲間、1cm もない小さな針のない茶色い蜂<写真 30>も見ました。針がないからといたずらしたひとは、頭の髪の中にたくさん蜂が入り込んで噛まれて大変でした。また、大きな真っ黒の鎧を付けたようなバッタは<写真 31>飛ぶと下の真っ赤な羽色が見えてぞっとしました。板根の発達した高い木には着生ランが見られ、花屋で見るのより数倍大きい鮮やかな熱帯の花々が

<写真 29>　モルフォ

<写真 30>　針なしバチ

<写真 31>　黒いバッタ

<写真 32>　熱帯の花

<写真 33>　熱帯雨林

堂々と咲いていました<写真 32、33>。

　このようにして現地で案内してくれた友人のおかげで、ほんとに充実した観察が出来ました。現地事情に通じているからできる日程で、とてもツアー旅行などでは回りきれない楽しい旅行が出来ました。この場を借りて再度深く感謝したいと思います。これを読んで下さった皆様ありがとうございます。この機会に中南米に出かけてみたいとお感じになるような事があれば望外の喜びです。